

世界の知覚的現われと一つである人間

— “私—世界、一体説の人間観—

村 上 直 樹

要旨：人間は、“知覚する、存在であるとみなされている。人間は、外の世界に関する膨大な情報を目や耳といった感覚受容器を通して脳に入力し、外の世界を知覚していると考えられている。しかし、この考え方には、問題がある。本稿の第一の目的は、そもそも外の世界に関する情報が目や耳といった感覚受容器を経由して脳に入力されているわけではないことを具体的に示していくことである。生きている人間の目の前には、物の世界が知覚的に現われており、そこには無数の情報—様々な物の形、大きさ、色、質感、道具の意味、言語の意味等々—がある。ただ、それらの情報は、そこにあるだけである。人間の体の中に入ってくることはない。人間は、外の世界に関する情報を体の中、脳の中に取り込んで、外の世界を知覚しているわけではないことを、本稿ではまず確認する。続いて、世界の知覚的現われと人間の関係に関する“私—世界、一体説の考え方を示す。その際、一般的には情報の受容と処理を行っていると思われている感覚系と脳神経系の活動に新しい位置づけを与える。“私—世界、一体説の考え方によると、生きている人間は、“知覚する、ことなく、常にすでに物の世界の知覚的現われの内にある。そして、最後に、人間は“知覚する、ことなく、常にすでに物の世界の知覚的現われの内にあるということ、ハイデガーは「人間は世界＝内＝存在である」という議論で示したとみなすことができるという指摘を行う。

1. 人間は“知覚する、存在ではない

顔の向きを変えたり、体を移動させることによって、人間は、次々と異なる物の世界の風景を経験していくことができるが、その際、人間は次々と異なる物の世界に知覚の作用を及ぼしていつているわけではない。“私—世界、の中心で、顔の向きを変える、体を移動させるということは、当然その人間が生きているということであり、“私＝身体、としての人間が生きているということは、“私—世界、という物の世界がすでに知覚的に現われてしまっているということである。非人称のモノの世界が“私＝身体、を中心とする物の世界として“転現、してしまっているということである⁽¹⁾。“私＝身体、がとりたてて知覚の作用を及ぼさなくても、周囲の物の世界は知覚的に現われる。生きている人間は、生きている人間であることによって、知覚の海の中に放り込まれている。生きている人間は、知覚から逃げるができないのである。

もし、人間が、知覚の作用を及ぼすことによって、周囲の物の世界が知覚的に現われるようになるのなら、人間の側が知覚の作用を一切止めることによって何も知覚的に現われなくすることができる。しかし、実際にはそんなことはできない。例えば、まぶたを閉じたとしても、まぶたの裏やまぶたの向こうの光は見える（大森 1999a：39）。それでは、“見る、という作用を止めることによって、まぶたの裏やまぶたの向こうの光を消すことができるかと言うと、そんなことはできない。そもそも私たちは“見る、という作用を働かせているわけではないのだ

から、それを止めることもできるわけではないのである。

“見る、とか“聞く、といった知覚の作用が存在しないことを、明快に指摘したのは大森荘蔵である。大森によると、言葉は、「或る「動作」と、その動作によって生じる「状態」とを一括して動詞的に表現する」（大森 1999a：37）、例えば、ある対象に向かって顔を向け、その対象が見えている状態になることを、「見る」と表現する。そこから、“見る、という知覚の作用が存在するという信念が生まれてくる。しかし、それは、実態に裏づけられない信念である。大森は、「何かが見えている」という事態において、何かを“見る、という知覚作用は存在しないと言う。「机が見えている」という事態において、机を“見る、という作用は存在しないと言うのである。もちろん机の方に顔を向けるという意味での「机を見る」という所作は存在する。しかし、それはあくまでも体の運動であって、知覚作用という意味での“見る、ではない（大森 1999b：262）。「机が見えている」という事態の中に机を“見る、という作用を見出すことはできない。机に向かって目から“見る、という作用が発せられているわけではない。

物の世界が知覚的に現われているのは、人間が知覚の作用を及ぼしているからではない。物の世界が知覚的に現われているのは、非人称のモノの世界が、“私—世界、という物の世界に“転現、しているからである。そして、その“私—世界、の中心に位置する“私=身体、としての人間は、知覚から逃げるができないのである。

反論する人はいるだろう。例えば、次のように。「人間が“知覚する、存在ではないというのは、言いすぎである。確かに、人間の目から“見る、といった作用は発せられていない。しかし、人間の目には、物の世界の大量の情報が入ってきている。この体の中に入ってくる情報、脳の中に入ってくる情報を人間は知覚している。そして、そのことが物の世界を知覚しているということである。人間が物の世界を知覚していないのならば、目や耳から物の世界の情報を入力する必要がないのではないか。」

もっともな反論である。しかし、脳の中に入ってくる情報の実態を確認した後も、こうした主張を唱えることができるだろうか。人間の脳の中には目や耳を経由して周囲の物の世界に関する膨大な情報が入力されており、その情報を脳が把握することによって人間は周囲の物の世界を知覚しているのだという主張を維持することができるだろうか。

私がかつて、目や耳といった感覚受容器を入り口として入ってきた物の世界に関する情報をもとに、脳が物の世界の三次元像を作り上げているのだという考え方の問題点を整理した（村上（直）2006：102-109）。それに対して、ここでは、そもそも目や耳を入り口として、物の世界に関する情報が本当に体の中、脳の中に膨大に入ってきているのかということを検討してみたい。そして、その上で、“私=身体、としての人間は、とりたてて知覚の作用を及ぼさなくても常にすでに知覚の内にあるのだという“私—世界、一体説の基本的な考え方をあらためて確認してみたい。

2. ムカデの体表の気持ち悪さは脳に入力されているか——目から入ってくる情報の実態①

かつて津市の古びたマンションの1階に住んでいた時、裏が神社の林ということもあって、度々ムカデがリビングに侵入してきた。そのムカデの気持ち悪さは、今でも忘れられない。てかてかと黒っぽい胴体も気味悪かったが、仰向けになって無数の脚をうごめかす様も汚らしかった。ムカデを見る度に、体がざわめいた。ムカデは見えるだけである。ただ、大きさに言

うと見えるだけで体に異変が生じるのだった。

ここで考えてみたいのは、私たちに何かが見えている時、その何かについての情報がそのまま目を經由して脳に入ってきていると思われているようだが、本当にそうなのかということである。ムカデの体表の気持ち悪さは、そのままの形で脳の中に入ってくるのだろうか。だから、体がざわめくのだろうか。

このことについては、まだあまり人に聞いたことがないが、そう考えている人は案外多いような気がする。周囲に見える物の色や形や表情が何となくそのままの形で脳の中に入ってきていると考える人の方がもしかすると多数派なのかもしれない。ちなみに、古典的アラビア光学では、物の形態的特徴を保持した像（コピー、レプリカ）がそのまま目に入ってくると考えられていた（佐々木 2001：34）。

しかし、目の実質的な働きのことを考えると、見えている物のあり様がそのまま——例えば、ムカデの体表の気持ち悪さがそのまま——目を經由して脳の中に入ってくるということはない。目は、光子から成る光を受容するための器官である。目に入ってくるのは光である。ムカデの姿は入ってこない。目はあたかも体の窓のようなものとしてあり、その窓のような目の外に物の世界が見えている。広がっている。このような構図があるがために、目の外にある物のあり様がすべて、窓としての目を通して体の中に入ってくるという錯覚が生じているのかもしれない。しかし、そのようなことは起きていない。目は光を受容しているだけである。

問題は、この目に入ってくる光である。見えている物のあり様がそのまま目の中に入っていないとしても、その光が見えている物のあり様に関する情報を乗せているのだとしたら、結局は見えている物のあり様が目を經由して脳の中に入ってくるということになるのかもしれない。そして、学問的には、そのように考えられている。例えば、ある自然科学の啓蒙書には、次のような記述がある。「投げられたボールの運動を人間が認識できるのはなぜだろうか、・・・それは、太陽などから発した光がボールに当たり、跳ね返った光が人間の目に飛び込むことによって、我々はボールの動きを知ることができるからである。」（石井 2005：22）

ボールに当たって跳ね返った光がボールに関する情報を担うことになり、その光が目を經由してボールに関する情報を脳にもたらすから人間はボールを認識できるということであろう。そして、この一連の過程に関しては、詳細な科学的説明が提供されている。例えば、光が目飛び込んでからのことに関しては、まず光が網膜に数百万個ある視細胞＝光受容細胞（桿体と錐体）によって電気の信号に変換される（光—生物電気変換過程）、すなわち光を媒体として伝えられてきた物に関する視覚情報が電気信号を媒体として伝えられるようになり、さらにその電気信号を媒体とする視覚情報が、視神経、外側膝状体を経て第一次視覚野に伝えられるといった科学的説明、さらに光を媒体として伝えられてきた視覚情報が電気信号を媒体として伝えられるようになる過程は、「フーリエ変換的な、アナログからデジタルへのコード化」（福岡 2014：20）であるといった科学的な説明が提供されている。

しかし、私が勉強不足であるからかもしれないが、物に光が当たって跳ね返る時に、どのようなことが起こるのかを説明した文章については読んだことがない。物に光が当たって跳ね返る時に、光はその物についての情報を自らに乗せるとのことだが、どのような情報をどのようにして乗せるのかを説明した文章を読んだことがないのだ。例えば、『固体物性入門』といった本には、「屈折率の差の大きい物質の接触している界面で、光はよく反射される。多くの物体はさまざまな化学組成を持つ微粒子や繊維の集合体であるので、入射光は多重反射を受け、

その結果、物体内部に光が深く浸透することはあまりない」（上野・日野・石井 1996：56）といった記述はある。しかし、当然かもしれないが固体物性についての本なので、物に当たって跳ね返る光がその物に関するどのような情報をどのようにして自らに乘せるようになるのかを説明した記述はない。

「ヒトの脳には、外界の“見えるもの”から、数限りない無数の視覚情報が取り込まれる」（岩田 1997：7）と言われ、「眼から入る情報は、すべての情報の九割以上」（水島 1994：4）とも言われている。そして、脳に取り込まれる情報の九割以上を占める目からの情報は、光に乗っているとされている。しかし、その光に乗っている無数の情報が具体的にどのような情報なのか、また光は物に当たって跳ね返る際にどのようにしてそれらの情報を自らに乘せることになるとのかが、説明されていないように思われる。

光が物に当たれば、とにかくその物についてのあらゆる情報が自動的に光に乗るようになるといったことはないだろう。では、どのような情報が、どのようにして光に乗るのだろうか。素人なりに考えてみたい。

まず、物が備えている表情はどうだろうか。例えば、先に挙げたムカデの体表の気持ち悪さといった表情は光に乗るだろうか。乗らないのではないだろうか。光は、光子と呼ばれる粒子から成る。光の強さは、それに含まれる光子の数によって決まる。また、一つ一つの光子のエネルギーは、光波の周波数に比例する。では、ムカデの体表の気持ち悪さといった物の表情は、こうした光によって表現できるだろうか。光子の数や光子のエネルギー量によって表現できるだろうか。不可能ではないか。「気持ち悪い」とか「ふんわりした」といった物が持つ表情は、数量で表現できるようなものではないだろう。

また、光が物に当たって反射するといった現象は、物が備えている「気持ち悪い」とか「ふんわりした」といった表情とは異なる次元で起こる現象である。「反射とか透過とかいう現象は、実は電子が光子を拾いとり、いわばちょっと「頭を搔いて」ためらってから新しい光子を放出した結果である」（Feynman 1985 = 2007：106）と物理学者は言う。こうした現象に「気持ち悪い」とか「ふんわりした」といった物の表情に関わる余地はない。

同様に、物が備えている意味も光には乗らないだろう。物は、それ自体で意味を備えている。しかも備えているのは、1つの意味ではない。例えば、アボガドという物には、「中は緑がかったクリーム色をしているもの」、「大きな種を持つもの」、「皮がかたいもの」、「寿司のネタになるもの」、「メキシコ料理の食材になるもの」、「スーパーで一個 120 円ぐらいで買えるもの」、「母親の好物」といった複数の意味が重なり合う形で備わっている。こうした重層的な意味が、アボガドに当たって反射した光の光子の数や光子のエネルギー量によって表現されているとは考えられない。

ただ、光は意味を乗せない、意味を運ばないという主張に対しては、次のような反論が考えられる。「お互いの部屋の窓が見える別々のマンションに住む水野さんと菊地さんの間で次のような取り決めをしたとする。夜、水野さんが菊地さんの部屋の窓に向かって、懐中電灯の光を2回点灯させるとそれは「明日いっしょにプールに行こう」という合図で、菊地さんが懐中電灯の光を3回点灯させるとそれは「いいよ」という合図であり、4回点灯させるとそれは「明日はちょっと」という合図である。このようにすれば、光によって「いっしょにプールに行こう」とか「いいよ」という意味を伝えることができるのではないか。光は意味を運ぶではないか。」

これも、一見もつともな反論である。しかし、実際には、懐中電灯が2回点灯するという出

来事、あるいは懐中電灯を2回点灯させるという行為が、取り決め＝コード化によって「明日いっしょにプールに行こう」という意味を持っているだけであって、懐中電灯が発する光それ自体が「明日いっしょにプールに行こう」という意味を乗せているわけではない。（また、目の前の物に当たって反射し、目の中に入ってくる光には、いかなるコード化もなされていないであろう。）

光それ自体に、物に備わっている表情や意味といった情報が乗ることはないだろう。よって、光が媒体となって、物に備わっている表情や意味といった情報が脳に伝えられることはない。

3. 光には乗るかもしれないが、脳に伝えられない情報——目から入ってくる情報の実態②

では、物の大きさはどうだろうか。目の前に、幅35センチメートルのノートパソコンがあるとす。その幅35センチメートルという情報は光に乗るだろうか。ノートパソコンに当たって反射した光が、幅35センチメートルで反射し、その幅35センチメートルの光を受けとめる何かがあるとすると、その何か幅35センチメートルという情報をキャッチする可能性があるかもしれない。物の大きさという情報は、光に乗る可能性がある。

しかし、人間の瞳の直径は2～8ミリメートルである。人間の瞳は、幅35センチメートルの光を受けとめることはできない。高さ1メートル70センチメートルの光も長さ3メートルの光も受けとめることはできない。よって、目の中に入ってくる光が物の大きさ（実寸）に関する情報を運ぶことはないと思われる。

また、物の世界の「奥行き」が、網膜のところで失われてしまうという議論もある。「立体的に広がる世界が、人間などの眼底に、スクリーンのようにひろがる光受容器（網膜）上では、平面的につぶれた状態で投影されてしまう」ことによって、物の世界の「奥行き」が網膜上で消失してしまうというのである（三嶋2001：123）。これは、立体的な物の世界に当たって反射した光は、眼底で平面的な網膜によって受けとめられるので、その際に、世界の「奥行き」に関する情報が失われてしまうという話である。

ある脳研究者は、「脳は、受け取った信号が、網膜上のどの位置にある神経節細胞からきた信号であるかを正確にすることができる。これによって視野のどの位置に見えるものかということが判明する」と言う（岩田1997：25）。しかし、上記の話によると、網膜のどの位置から来た信号であるのかが脳に伝わったとしても、視野のどの位置から来た信号であるのかが伝わったことにはならない。視野は立体的だからだ。物の世界の「奥行き」に関する情報は、脳には伝わらないのである。

先に述べたように、物に備わっている表情や意味といった情報は、光には乗らない。また、光に乗る可能性がある情報——物の大きさや「奥行き」——もあるが、以上のように、それらの情報が目を經由して、脳に伝えられる可能性はない。では、光に乗って目の網膜に至り、網膜を經由して脳に伝えられる外界の物についての情報はないのだろうか。

4. 視神経の数と世界の点の数——目から入ってくる情報の実態③

中学1年生用の理科の参考書の中に、次のような記述がある。「光が反射するときは、反射の法則が成り立っている。しかし、物体の表面を拡大するとでこぼこしているの、右の図の

ように光は四方八方に反射する。このため、どの方向からも見えるのである。」（『学研ニューコース中1理科』2002年：17）これは、言いかえると、光は物の各点各点において乱反射しているので、物の各点各点からあらゆる方向に向けて光が放たれている、よって人間の目がどこに位置していようとも、外界のすべての物の各点各点から、その目に入っていく光があるということだろう。つまり、人間の目には、外界のすべての物の各点各点（その点の大きさはここでは問わないことにする）で反射した光が入ってきているのである。問題は、その光にどのような情報が乗っているのかということである。

正確な言い方はわからないが、その光には、物の各点各点の物理的性質に関する情報、あるいは物の各点各点で起きた光子と電子の相互作用に関する情報が乗っているととりあえず言うておこう。それでは、その情報は、首尾よく目の網膜を経由して脳に伝えられているのだろうか。ここで出てくるのが、数の問題である。

人間の目は巧妙な機械で、「たった五つか六つの光子が当れば、その神経細胞はたちまち活動しはじめて脳に信号を送るようにできている」（Feynman1985 = 2007：20）とか、「網膜の五〇平方マイクロメートルに同時に五〜八個くらいの光量子があたれば、光として感じるができる」（村上（元）1995：58）といったことが言われている。では、人間の目には、外界のすべての物の各点各点から何個ぐらゐの光子が入ってきているのだろうか。見当もつかない。

ただ、手のひらの上に1秒あたりに降り注ぐ蛍光灯からの光子の数は、大体10の16乗、つまり1兆個のさらに1万倍とのことである（竹内2005：45-46）。兆は億の1万倍である。さらにその1万倍である。この例から推測するに、1秒あたり目に入ってくる光子の数は、間違いなく1億を超える。そして、光の信号を電気の信号に変える網膜の視細胞の数は、約1億個である（前田1996：9-10；福岡2014：19）。また、光が照射されてから視細胞電位が発生するまでの時間は、大体100分の1秒か、それ以下と言われている（村上（元）1995：74）。

さて、こうしたアバウトな数字から、目に入ってくるすべての光子が乗せている情報を網膜の視細胞が電気の信号に変えていると言えるだろうか。脳に伝えるために、外界の物の各点各点に関するすべての情報を網膜の視細胞は電気の信号に変えていると言えるだろうか。私には、わからない。ただ、ここでより重要だと思われるのは、また別の数字である。そして、こちらの数字の方はわかりやすい。

網膜の視細胞によって電気の信号に変えられた光の情報は、ついで神経節細胞によって、0か1のデジタル信号に変換され（茂木1997：43）、神経節細胞の神経線維＝視神経によって外側膝状体経由で脳に送られていく。そして、この視神経は、片目で100万本（あるいは120万本から150万本）しかない（村上（元）1995：127；池谷2007：353；福岡2014：19）。光の信号は億という数の視細胞によって電気の信号に変えられるが、それを0か1かのデジタル信号として脳に送る視神経は片目で100万本しかないのである。外界の物の各点各点の情報を目から脳の視覚中枢に送る装置——束になって眼球の外に出ていく視神経——は、100万本といった数しかないのである。

問題は、100万本といった数で、外界の物の各点各点に関するすべての情報を脳の視覚中枢に送ることができるのかということである。そもそも外界の物の表面は、いくつの点でできているのだろうか（点でできているとして）。点のサイズにもよるだろうが、正直なところまったく想像がつかない。またアバウトな数字を持ち出せば、液晶ディスプレイのドット数は176万とか230万といったものである。目の前に広がる新宿駅西口の風景が点でできているとし

て、その点の総数はいくつぐらいだろうか。点のサイズにもよるが、当然 176 万とか 230 万をはるかに超えるだろう。よって、100 万本といった数しかない視神経が新宿駅西口の各点各点に関する情報を脳の視覚中枢に送ることはできないはずである。（それでも、新宿駅西口の全風景が目の前に現われているのであるが。）

外界の物の世界の各点各点に関するすべての情報は、脳に伝えられていないと思われる。そして、そのことは、「入力として感覚は有限個の神経回路を伝わって脳に達するから、どんな印象もその構造はむしろモザイクに近い」（Moore1989 = 1995 : 88）といった言い方でずいぶん前から指摘されてきている。また、近年において、脳研究者の池谷裕二も、外界の物を認識するには外界からの情報はあまりにも量が少ない、網膜からあがってくる情報はわずかであると指摘している。池谷は言う。「視神経は 100 万本しかないわけだ。僕たちの目は、本来ならば、100 万画素のデジタルカメラ程度の解像度しかない。この程度の画素数では、直線だってギザギザの線にしか見えないはずなんだ。」（池谷 2007 : 353）さらに言えば、工学部の学生向けに書かれた脳科学の入門書の中にも、「大脳の視覚野が処理する「実際の」視覚情報は極めて少ない」といった記述がある（高橋 2016 : 22）。

5. 脳が補っているわけでもない

さて、以上に見てきたように、外の物の世界に関する視覚的な情報は、思った以上に、脳の中には入ってきていない。物が備えている表情や意味は入ってこないし、物の大きさや物の世界の「奥行き」も入ってこない。物の世界の各点各点に関する情報については、入ってくる可能性があるが、そのすべてが入ってくることはないと思われる。

であるから、「人間の脳には、例えば目から物の世界に関する大量の情報が入ってきており、その情報を人間は知覚している。人間が物の世界を知覚していないのならば、そもそも目から物の世界に関する情報を入力する必要がないではないか。人間が“知覚する、存在ではないというのは、言いすぎである」という議論は成り立たない。

それにしても、人間は、例えば、目という道具を使って外界の物の情報を収集して、その情報を把握することによって“知覚する、存在であるという考えは根強い。言いかえると、人間が“知覚する、には、外界の物の情報を体の中に取り込んで、それを把握することがどうしても必要だという考えは根強い。

ちなみに、脳に入ってくる外界に関する情報は乏しいが、足りない分は脳が補っているのだ、「奥行き」の情報についても脳が計算や推論によって補っているのだという説があるが（池谷 2007 : 353 ; 三嶋 2001 : 123-124）、そうした説は物を知覚したり認識したりするにはとにかく物に関する情報を体の中、脳の中に確保しなければならぬという上記の考えを前提にしていると思われる。ただ、補うには、前もってその物に関する情報を知っていなければならない。知っているから補えるわけである。では、どんな時でも、脳は目の前の物の世界に関する情報を前もって知っていて、足りない情報を補っているから、目の前の物の世界が見えるのだろうか。

初めて訪れたトルコの Cappadocia。あなたの脳の中にその風景の痕跡はないはずである。よって、あなたの脳は、目から入ってくる乏しい情報を補足することはできないはずである。しかし、すべてが見えている。目から脳に入ってくる情報が乏しく、また脳が足りない情報を補うことができなくても、Cappadocia は広々と視覚的に広がっている。つまり、脳に入って

くる物の世界に関する情報が乏しく、脳による補足がなくても、物の世界は見えるのである。そのすべてが見えるのである。欠落もなく、物の輪郭がギザギザになることもなく。

6. 情報は一切入ってきていないとも、..

いや、「情報」という概念について、少し厳密な立場に立てば、脳の中に物の世界に関する情報は目を經由して一切入ってきていなくても、存在もしないが、物の世界はそのすべてが見えると言った方がいいかもしれない。物に光が当たって反射し、反射した光が目に入り、網膜で視細胞電位が発生し、脳の視覚中枢に伝わっていく過程は、物理化学的な因果の過程として記述することができる。その際、「情報」という概念は不要である。しかし、あえて「情報」という概念が使われているのは、上記の過程が単なる物理化学的な因果の過程ではないとみなされているからだろう⁽²⁾。それは、情報が伝わっていく過程とみなされているのである。では、そこで言う「情報」とは何か。

情報を、意味内容が捨棄された情報（情報工学が扱う情報）と意味内容を有する情報に区分するならば（西垣 2004：14）、物の表面から脳に伝えられるとされる情報とは後者である。意味という次元は生物にとって不可欠なものであるが、近代自然科学は意味を切り捨てた（川出 2006：2）。これに対して、分子生物学は、「情報」という概念を導入することによって、意味の次元を取り込んだ（川出 2006：27）。同様に、視覚メカニズムの研究も「情報」という概念を使用することによって、広義の意味の次元を議論の中に潜り込ませていると思われる。

では、広義の意味内容を有する情報は、光という媒体によって目に伝えられているだろうか。光は目に入ってくる。これは確実だ。しかし、意味内容を実体とする情報は入ってくるだろうか。

ほんの少しだけ、迂回しよう。例えば、あなたの目の前に、ある物があり、それがある大きさ、形、色を持ったものとして、あるいはある表情を持ったものとして、あるいは何らかの道具として使えそうなものとして、あるいはある言語的意味を持ったものとして知覚的に現われている時に、すなわちハイデガーの言う「として＝構造」（Heidegger 1927 = 2013：222-225）を持って現われている時に、広義の意味が存在すると言える。情報が存在すると言える。そして、その広義の意味は、その物の知覚的現われとは切り離せない。意味は単独では存在しない。こうしたことを、一般的に言い直すと次のようになる。広義の意味が存在するということは、ある項目Aがある項目Bに対して、ある大きさ、形、色を持ったものとして、あるいはある表情を持ったものとして、あるいはある道具的有用性を持ったものとして、あるいはある言語的意味を持ったものとして、知覚的に現われるということである。

このように考えると、光や電気の信号によって、物の世界に関する情報が目や脳に伝えられているとは言えないだろう。光や電気の信号が伝わっていく過程に、いかなる意味内容も存在しないからだ。情報が存在しないからだ。なぜなら、そもそも網膜に対しても、外側膝状体に対しても、脳の神経細胞に対しても、光や電気の信号は知覚的には現われないからだ。物に光が当たって反射し、反射した光が目に入り、網膜で視細胞電位が発生し、脳の視覚中枢に伝わっていく過程は、情報が伝わっていく過程ではない。脳の中に物の世界に関する情報は入っていない。

7. 情報を取り込んで「知覚する、のではなく、常にすでに知覚の内にある人間

屋外に出る。そこには、無数の物がある。それらには、無数の形、色、質感があり、無数の言語的意味と表情がある。すなわち無数の情報がある。そして、それらの情報は、そこにあるだけではないのだろうか。

私には、物の世界の情報が体の中に、脳の中に入ってくるということが、そもそもどうということなのかがわからない。物そのものを体の中に入れることはできるだろう。例えば、注射器のようなものを使って。しかし、物に関する情報を体の中、脳の中に入れることができるのか。例えば、目の前の自転車の形を、あるいは形に関する情報を体の中、脳の中に入れることができるのか。形、あるいは形に関する情報は、体とか脳とは異なるカテゴリーに属する存在である。だから、両者はそもそも交わることはないのではないか。

もちろん、目の前に物の世界が現われている際には、物に当たって反射した光が目に入り、網膜が反応し、視神経が活動電位を外側膝状体経由で脳に送っている。しかし、上述のように、その過程には、意味内容を実体とする情報は存在しない。また、脳の神経細胞集団もせわしなく活動を続けているだろうが、神経細胞集団は物理化学や電子工学の法則に則った活動をしているだけである。神経心理学者の山鳥重も言うように、「脳は物理化学的活動をしているだけ」である（山鳥 2011：19）。

納得する人は少ないだろう。それは、すでに述べたように、物を知覚したり認識したりするにはとにかく物に関する情報を体の中、脳の中に確保しなければならないという考えが根強いからである。しかし、物を知覚したり認識したりするには、物に関する情報を体の中、脳の中に確保しなければならないという考えには、どういう根拠があるのだろうか。そもそも物に関する情報が脳の中に入ってきたところで、それを把握する（知覚する、認識する）主体が存在しないではないか。

知覚主体、認識主体としての心あるいは〈私〉といったものが存在しないことについては、かつて詳述した（村上（直）1998：181-191；村上（直）2005：169-190）。目や耳といった感覚受容器から入ってきた物の世界の情報をもとにして、脳が物の世界の三次元像を作り上げているという話がおかしいことも、すでに指摘した（村上（直）2006：102-109）。また、脳が、感覚受容器から入ってきた情報を知覚したり認識したりしているとも言えない。「脳の神経細胞が見ている」といった言葉づかいをする人もいるようだが⁽³⁾、細胞膜のチャネルを通してナトリウムイオンがどんどん入ってきて神経細胞の内側と外側の電位差が小さくなるといったことは、「見る」ことでも「聞く」ことでも「認識する」ことでもない。

人間は、物の世界の情報を体の中に取り込んで、知覚したり、認識したりしているのではない。生きている人間の目の前には、物の世界が知覚的に現われており、そこには無数の情報——様々な物の形、大きさ、色、質感、道具的意味、言語的意味等々——がある。ただ、それらの情報は、そこにあるだけである。人間の体の中に入っていくことはない。また、目の前に、物の世界が知覚的に現われている状況においては、様々な物に当たって反射した光や様々な物の振動によって発生した空気の疎密波が目や耳といった感覚受容器に入り、網膜や内耳の蝸牛管の有毛細胞で電気信号が発生し、脳に伝えられていく。さらに、その脳では、神経細胞集団が物理化学的活動を続けているだろう。

そして、人間の体の中におけるこのような活動は、物の世界を知覚する活動でも、認識する

活動でもない。人間の体の側から物の世界の側への働きかけは、認められない。人間の体の中における上記のような活動が原因となって、物の世界が知覚的に現われているのではない。そこに因果関係はない。

しかしながら、物の世界の知覚的な現われと人間の体の中における上記のような活動は、一体である。不可分である。一体＝不可分であるから、物の世界が知覚的に現われるには、網膜や蝸牛管の有毛細胞や脳の神経細胞集団の活動が不可欠である。これらが活動を止めてしまえば、物の世界は知覚的に現われなくなる。（これらの一部が活動を止めれば、物の世界の知覚的現われに異変が生じる。例えば、脳の第四次視覚野が活動を止めると物の世界は色を持って現われなくなる。）逆に言えば、感覚系や脳神経系が活動していれば、その活動と一体となって、物の世界は知覚的に現われるのである。

また、感覚系や脳神経系が活動しているということは、人間が生体として生きているということの一環であるから、人間が生きているということは、すなわち物の世界が知覚的に現われているということである。生きている人間は、“知覚する、ことなく、常にすでに知覚の内にあるのである。

“私＝世界、一体説の枠組みの中で言うと、次のようになるだろう。人間が生きているということは、その人間を“私＝身体、とする“私＝世界、という物の世界が発現しているということである。非人称のモノの世界が、ある人間を“私＝身体、とする一人称の物の世界＝“私＝世界、に“転現、しているということである。それは、様々な情報に溢れた物の世界と生きている“私＝身体、としての人間、感覚系や脳神経系が活動している“私＝身体、としての人間が一体となって発現しているということである。よって、生きている人間は、常にすでに物の世界の知覚的現われの内にあるのである。生きている人間は、“私＝身体、として“知覚する、ことなく、常にすでに知覚の内にあるのである。

そして、人間がこうした存在の仕方をしていることを、ハイデガーは、世界＝内＝存在という言葉を使って指摘していたと私は考えている。

8. 世界＝内＝存在としての人間——ハイデガーと“私＝世界、一体説

ハイデガーの存在に関する探究の中で、人間は、現存在という規定を与えられている（Heidegger1927 = 2013 : 10, 16-17）。この現存在に関する詳しい説明は省略するが、ハイデガーは現存在の基本的な体制（存在体制）が世界＝内＝存在であると言っている（Heidegger1927 = 2013 : 75）。現存在は、世界＝内＝存在という在り方をしている。すなわち、ハイデガーによれば、人間は世界＝内＝存在なのである。

しかし、「人間は世界＝内＝存在である」と言われても、何か当たり前のことを言われているような気がしないだろうか。「世界の内にある存在って、そんなの当たり前じゃないか」という声が聞こえそうである。そして、ハイデガーは実際に当たり前のことを言ったのだという見方もないわけではない。

加賀乙彦の処女作『フランドルの冬』（1967年）。作中、フランドル地方の精神病院に勤務する日本人医師コバヤシは、医長であり精神病理学の大家でもあるドロマールとハイデガー、サルトル、メルロ＝ポンティに関する会話を交わす。その中でドロマールは言う。「要するに、当り前の単純なことなんです。どんな人間も、この世に生きている。無数の物体や生物や他人

とかかわりなしには生きられない。人間のこの運命的なありさまが世界内存在でしょう。つまり人間のアプリアリな規定は世界内存在です。ここまでは哲学者の考えたことだ。ところがこの凡庸な人間の規定に満足せず、そこから脱出しようとする人間もいる。それが狂人と自殺者です。」(『フランドルの冬』新潮文庫版：392) 人間は、無数の物体や生物や他人がひしめく世界の中におり、それらと関係を持たずには生きていけない。それが、世界=内=存在ということの意味であるという話である。世界=内=存在に関するこのような解釈は、加賀乙彦のそれと言うよりは、あくまでも作中人物ドロマールのそれであろうが、それにしても、この解釈はちょっと違うのではないだろうか。

世界=内=存在に関して、『存在と時間』(1927年)の中には、次のような記述がある。まず、世界=内=存在の内=存在は、単に「～の中の存在」という意味ではない(Heidegger1927 = 2013 : 76-77)。内=存在とは、「もとに在る」という意味であり(Heidegger1927 = 2013 : 78)、「もとに在る」とは単に「並存」しているということではない(Heidegger1927 = 2013 : 78)。現存在すなわち人間が世界=内=存在であるということは、人間と世界が「並存」しているということではなく、人間それ自体がそもそも世界の内にいるということ、つまり人間が在ることにおいてすでに世界が人間に対して発見されてあらわになっているということである(Heidegger1927 = 2013 : 79)。

人間は、まず世界の内にはなく、それが時に世界と関係を結ぶというのではない(Heidegger1927 = 2013 : 82)。人間は、世界=内=存在である以上、その都度すでに世界を発見してしまっている(Heidegger1927 = 2013 : 163)、あるいは、気がつけばいつもすでに世界の内に投げ入れられているのである。この世界の内に投げ入れられているというありさまのことをハイデガーは「被投性」と呼んでいる(Heidegger1927 = 2013 : 202)。

『存在と時間』の20年後に書かれた『ヒューマニズムについて』(1947年)によると、人間は主観として世界という客観と関係を結ぶのではない。人間の本質は、主観—客観関係の内にはない(Heidegger1983 : 132-133)。人間は、常にすでに世界の「もとに在る」のである。「椅子のような対象は、ただ客体的に存在しているだけ」である。それに対して、人間は、「一つの世界が共に現に存在するという仕方、現に存在している」のである(Heidegger1925 = 2006 : 85)。

そして、さらに言えば、人間が常にすでに世界の「もとに在る」ということだけではなく、世界の存在にとって人間が必要であるということもハイデガーによって指摘されている。例えば、1963年における精神科医メダルト・ボスの対話において、ハイデガーは次のように言っている。「存在者が現存しうるためには、またそれとともに一般に存在、存在の開けということがありうるためには、人間が現(Da)の内へ、空き地、すなわち存在の明るみの内へと入って、そのただなかに立つということが必要です。人間は存在の明るみとして実存するのです。このように、存在者の存在は人間なしではまったくありえません。」(Heidegger1987 = 1991 : 241)

人間すなわち現存在は、「世界が開示される場である」(高田 2013 : 709)から、様々な存在者からなる世界が存在するには、人間が必要なのである。人間と世界の存在との間には、このような相互性、相補性がある(細川 1992 : 27-28)。そして、人間と世界の存在に関するこのような考え——「存在あるいは存在の露呈性は人間を必要とし、逆に人間は存在の露呈性の内に立つ限りでのみ人間である」という考え——が、ハイデガーの根本思想なのである(細川

1992：28）。

本題に戻ろう。「人間は世界=内=存在である」ということは、どういうことなのかという話だった。答は、ここまでの引用で明らかではないかと思われるが、最後に念押しで森本浩一の端的な指摘を引いておきたい。初期ハイデガーを論じた論文の冒頭で森本は言う。「人間存在にとって、常に既に或る仕方世界が立ち現れているということは、そもそも自己が現に存在することと同義的である。こうした観点から、ハイデガーにとっての人間存在つまり「現存在」は、「世界=内=存在」と特徴づけられる。」（森本 1994：116）

“私—世界、一体説では、生きている人間は、“私=身体、として“知覚する、ことなく常にすでに物の世界の知覚的現われの内にあると考える。そして、人間がこうした存在の仕方をしていることを、ハイデガーは「人間は世界=内=存在である」という言い方で指摘したのである。ただし、“私—世界、一体説の考えとハイデガーの考えは、まったく同じではない⁽⁴⁾。そのことについては、また別の機会に論じてみたい。

〔註〕

(1) “私—世界、一体説の一番基本的な考え方は、非人称のモノの世界が“私=身体、を中心とする物の世界に“転現、しているというものである。以下、この基本的な構図について説明する。今、あなたの目の前には、無数の物からなる物の世界が広がっているだろう。さて、その中で一匹の猫が歩いているとする。その猫の目の前には、物の世界が広がっているだろうか。直接確認することはできないが、広がっているだろう。では、その猫の体を中心とする物の世界は、あなたの体を中心とする物の世界と同じようなあり方をしているだろうか。これも直接確認することはできないが、同じではないだろう。では、なぜ同じではないのだろうか。同じ物の世界を人間と猫では異なるように知覚しているからだろうか。しかし、この後本文でも指摘するように、そもそも“知覚する、という作用は存在しない。あなたと猫が同じ物の世界を異なるように知覚しているから、それぞれの目の前に異なるあり方の物の世界が広がっているわけではない。

では、あなたと猫の脳神経系が物の世界の三次元象を作り上げており、あなたと猫では脳神経系のあり方が異なるから目の前に異なる物の世界の三次元象が広がっているのだろうか。しかし、ここでは、詳述できないが、脳が物の世界の三次元象を作り上げるといったことはない（村上（直）2006：102-109）。目の前に広がっているのは、像ではなく実物である。あなたと猫はまぎれもない物の世界の中にいるが、その物の世界が異なる様態を持っているのである。そして、こうしたことは、20世紀の前半にすでに指摘されていた。例えば、ユクスキュルの所説をふまえて、カッシーラーは次のように言っている。「あらゆる生物に対して同一な、「物」という、絶対的実在が存在していると仮定することは、はなはだ素朴な独断論であろう。実在は唯一かつ同質のものではない。それは限りなく多様なものであり、生物の異なった種類の数と同数の、異なった形態と種類をもつものである。・・・ハエの世界にはただ「ハエの物」のみが見出され、ウニの世界には「ウニの物」のみが見出される。」（Cassirer 1944 = 1997：61-62）

では、あなたと猫の目の前に広がる物の世界は、なぜ異なる様態を持っているのだろうか。それは、目の前に広がる物の世界の様態は、その中心にいる生き物の感覚系及び脳神経系の活動と一つであるからである。不可分だからである。あなたの目の前に広がっている物の世界の様態は、あなたの感覚系及び脳神経系の活動と一つなのである。その証拠に、あなたの脳の第四次視覚野が活動を止めるとあなたの目の前の世界は色を失うだろう。そして、猫は人間とは異なる感覚系及び脳神経系を持っているから、その活動と不可分である目の前の物の世界は人間の目の前の物の世界とは異なるのである。あなたと猫は異なる物の世界の中にいるのである。“私—世界、一体説では、物の世界の中心に位置する生き物の体を“私=身体、と呼ぶ。（“私の身体、と呼ばないのは、私という主観が客体としての身体を所有しているわけではないからである。）そして、“私=身体、とその周囲に広がる物の世界を合わせた物の世界全体のことを“私—世界、一体説では、“私—世界、と呼ぶ。あなたと猫は異なる“私—世界、の中にいるのである。

しかし、である。あなたが目の前の猫を抱き上げると、その猫の“私—世界、でもその猫はあなたに抱き上げられるだろう。ということは、あなたと猫は同じ世界の中にいるのだろうか。同じ世界の中にいるのである。あなたと猫

は異なる “私—世界、の中にいるが、同じ世界の中にもいるのである。では、この同じ世界とはどのようなものか。

今ある生き物が生き始めたとする。すると、それと同時に、その生き物の体を “私=身体、とする新たな “私—世界、という物の世界が現われ始めることになる。では、この新たな “私—世界、は無から発生してくるのだろうか。無から発生するというのも一つの考え方である。しかし、無から発生してくるとは考えにくいのではないか。何らかの存在を基盤として発生してくるのではないか。では、その基盤とは何か。

ある生き物の死は、その感覚系及び脳神経系の活動と一つである “私—世界、の消失である。物の世界の消失である。そして、すべての生き物が死に絶えると、すべての物の世界が消失することになる。しかし、すべての生き物が死に絶えても残る存在があるだろう。それを “私—世界、一体説では、「非人称のモノの世界」と呼ぶ。通常の意味での物の世界= “私—世界、は、必ず誰かにとっての世界である。“私=身体、にとっての世界である。物の世界は、必ず一人称の世界である。それに対して、非人称のモノの世界は、誰かにとっての世界ではない。また、この非人称のモノの世界がどのような様態を持っているのかは、決して知ることができない。

そして、この非人称のモノの世界を基盤として、新たな “私—世界、という物の世界が発生してくるのである。モノが物に転化し、“私=身体、を中心として知覚的に現われるようになるのである。このことを、“私—世界、一体説では “転現、と呼ぶ。非人称のモノの世界が “私—世界、という物の世界に “転現、するのである。なお、非人称のモノの世界は、“私—世界、という物の世界に “転現、した後に消えてしまうわけではない。無限の生成変化に溢れた非人称のモノの世界は、次々と無限の生成変化に溢れた物の世界に “転現、し続けるが、同時に物の世界の背後に、裏側に存在し続けるのである。目の前の物の世界は、この非人称のモノの世界の顕現である。あらゆる物の世界の背後には、この非人称のモノの世界が存在している。あらゆる物の世界は互いに異なる世界ではあるが、同時に同じ非人称のモノの世界でもあるのである。あなたと猫は異なる “私—世界、の中にいるが、同時に同じ非人称のモノの世界の中にもいるのである。

“私—世界、一体説では、物の世界を「多にして一」と考える。生き物の体を “私—身体、とする “私—世界、という物の世界は、多であるが、それは同時に非人称のモノの世界という一でもある。また、非人称のモノの世界は「一にして多」である。非人称のモノの世界は一つしかないが、それは無数の “私—世界、という多でもある。物—モノの世界は、「多にして一、一にして多」なのである。(この「多にして一、一にして多」という言い方は、井筒俊彦から借用している (井筒 1989 : 98)。)

- (2) 水本正晴によると、情報概念が使われるのは、当該の過程が単なる因果的な過程ではなく、心的表象に関わっているとみなされているからである (水本 2012 : 9)。我々の考えでは、情報概念が使われるのは、当該の過程が広義の意味の次元に関わっているとみなされているからである。
- (3) こうした擬人的な言葉づかいが不適切であることは、大森荘蔵が指摘している (大森 1998 : 267-274 ; 大森・坂本・甘利 1986 : 144-157)。
- (4) 森本浩一は、先の引用文のすぐ後に、「常に既に世界が立ち現れているとは、現に存在するものについての先行的な「理解」が働いているということである」(森本 1994 : 116) と続けている。この先行的な「理解」といったものは、“私—世界、一体説の考えにはない。また、メダルト・ボスの対話において、ハイデガーは次のように語っている。「感覚刺激から「表象」が発生するという理論は、まったくのまやかしです。……黒板の知覚を感覚への刺激から説明するという段取りになったとき、その人はもう黒板を見てしまっています。この感覚刺激理論では、(黒板が)「ある」ということだけをとってみても、それは一体どこに残っているのでしょうか。刺激がどんなに集積し、強烈になろうとも、刺激は決してこの「ある」を生み出しません。この「ある」は、一切の「刺激されてあること」に先だってすでに与えられています。」(Heidegger 1987 = 1991 : 225) 感覚への刺激が黒板の知覚を生み出すわけではないとみなす点において、ハイデガーの考えと “私—世界、一体説は一致する。ただし、“私—世界、一体説は、黒板の知覚が成立するには、感覚への刺激が不可欠であるとみなす。この点で、“私—世界、一体説とハイデガーの考えは袂を分かたろう。

〔文献リスト〕

Cassirer, E. 1944 *An Essay on Man*, Yale University Press. = 1997 宮城音弥訳『人間』岩波書店

- Feynman, R.P. 1985 *QED :The Strange Theory of Light and Matter*, Princeton University Press. = 2007 釜江常好・大貫昌子訳『光と物質のふしぎな理論』岩波書店
- 福岡伸一 2014 「生命科学は何を解明してきたか？」『kotoba』16
- Heidegger, M. 1925 *Kasseler Vorträge*. = 2006 後藤嘉也訳『ハイデッガー カッセル講演』平凡社
- Heidegger, M. 1927 *Sein und Zeit*, Max Niemeyer. = 2013 高田珠樹訳『存在と時間』作品社
- Heidegger, M. 1983 *Lettre sur l'humanisme*, Aubier.
- Heidegger, M. 1987 *Zolliker Seminar*, Vittorio Klostermann. = 1991 木村敏・村本詔司訳『ハイデッガー ツォリコーン・ゼミナール』みすず書房
- 細川亮一 1992 『意味・真理・場所』創文社
- 井筒俊彦 1989 『コスモスとアンチコスモス』岩波書店
- 池谷裕二 2007 『進化しすぎた脳』講談社
- 石井 茂 2005 『ハイゼンベルクの顕微鏡』日経BP社
- 岩田 誠 1997 『見る脳・描く脳-絵画のニューロサイエンス』東京大学出版会
- 川出由己 2006 『生物記号論』京都大学学術出版会
- 前田章夫 1996 『視覚のメカニズム』裳華房
- 三嶋博之 2001 「行為の意味と価値を特定する視覚情報τ(タウ)」佐々木正人・三嶋博之編『アフォーダンスの構想-知覚研究の生態心理学的デザイン』東京大学出版会
- 水本正晴 2012 『ワイトゲンシュタイン VS. チューリング』勁草書房
- 水島宜彦 1994 『フォトンの謎』裳華房
- 茂木健一郎 1997 『脳とクオリア』日経サイエンス社
- Moore, W. 1989 *Schrödinger: Life and Thought*, Cambridge University Press. = 1995 小林澈郎・土佐幸子訳『シュレーディンガー』培風館
- 森本浩一 1994 「技術としての真-初期ハイデッガーおよびデヴィッドソンにおける「理解」の哲学」『横浜国立大学人文紀要、第一類、哲学・社会科学』40:116-98
- 村上元彦 1995 『どうしてものが見えるのか』岩波書店
- 村上直樹 1998 「内言の自己意識と〈私〉」日本記号学会編『聲・響き・記号(記号学研究18)』東海大学出版会
- 村上直樹 2005 「〈私〉の消去の後に1-性起としての世界と人間」『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科) 22:169-190
- 村上直樹 2006 「〈私〉の消去の後に2-性起としての世界と人間」『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科) 23:99-111
- 西垣 通 2004 『基礎情報学』NTT出版
- 大森荘蔵 1998 「人間・脳・コンピュータ」『大森荘蔵著作集 第七巻 知の構築とその呪縛』岩波書店
- 大森荘蔵 1999a 「見えている」『大森荘蔵著作集 第六巻 新視覚新論』岩波書店
- 大森荘蔵 1999b 「心」『大森荘蔵著作集 第六巻 新視覚新論』岩波書店
- 大森荘蔵・坂本百大・甘利俊一 1986 「脳・機械・自由意志」『現代思想』2月号:144-172
- 佐々木正人 2001 「アフォーダンスの構想の源」佐々木正人・三嶋博之編『アフォーダンスの構想-知覚研究の生態心理学的デザイン』東京大学出版会
- 高田珠樹 2013 「用語・訳語解説」マルティン・ハイデッガー『存在と時間』作品社
- 高橋宏知 2016 『メカ屋のための脳科学入門』日刊工業新聞社
- 竹内繁樹 2005 『量子コンピュータ』講談社
- 上野信雄・日野照純・石井菊次郎 1996 『固体物性入門』朝倉書店
- 山島 重 2011 『言葉と脳と心』講談社